

本日、このよき日に、御来賓の方々、保護者の皆様の御臨席を賜り、第七十八回東大谷高等学校卒業証書授与式を挙行できますことは、誠に大きな喜びです。卒業証書を授与された二百六十九名の皆さん、卒業おめでとうございます。教職員一同、心よりお祝いをいたします。そして、保護者の皆様、本日は誠にありがとうございます。改めてお祝いを申し上げます。

皆さんが本校に入学したのは二〇二三年四月のことです。それから一月後、新型コロナウイルス感染症が制度上のいわゆる第五類に分類されるようになり、日常生活の回復が本格化しました。皆さんの学年は中学校での三年間すべてをコロナ禍の下で過ごし、各活動の中止や縮小を絶えず経験してきたので、本校に入学してから、状況が改善されていくことを実感したものと察します。特に皆さんの印象に残っているのは、体育大会や文化祭などの行事なのでしょう。今年度は、コロナ禍以前を上回る規模でそれらの行事を実施することができました。しかし、卒業に当たって皆さんに特に憶えてほしいことは、皆さんが入学して以降、本校における宗教的情操教育の取り組みも元の姿に戻り、さらに拡大していったことなのです。

「元に戻った」ことの例として、講堂朝礼が挙げられます。皆さんが一斉に声を出したり、歌ったりすることが、制限を受けずに行われるようになりました。そして、「さらに拡大した」ことの例として、生徒、教員、外部の方による感話が多く行われるようになり、皆さんが人前で話をする機会、人の話を聴く機会が増えたことが挙げられます。皆さんのうち多くの人が、宗教の授業で一度は感話を担当したのではないのでしょうか。

感話については、それが得意な人も苦手な人もいるのですが、いずれにしても、話す際は少なからず緊張したはずですが、感話は、誰によるものなのかが分からない匿名による書き込みとは異なります。互いに相手は何者であるのかを承知した上で、「私が」「あなたに」話をするのです。このことをしっかりと受け止めると、話をするとき、自分の責任が問われていることに気づき、さらに緊張が高まるはずですが。

コロナ禍において他者との接触が困難になった時期は、この「私が」「あなたに」話すことが困難になった時期であるともいえます。そのため、主にインターネット上での匿名性の高い無責任な書き込みやコメントが増え、その傾向は現在も続いているものと考えられます。社会全体がそのような方向に進んでいるとき、この東大谷高校では、「私が」「あなたに」話す機会を増やしました。このことが、卒業に当たって皆さんに特に憶えてほしいことなのです。

古代ギリシャの哲学者ソクラテスは、後世の思想家たちに計り知れないほど大きな影響を及ぼしました。しかし、このソクラテスは著作を全く遺していません。それは、書物の著者は読者の問いかけに答えることができないので、言葉を発した者としての責任を果たすことができない、と考えたからです。このような立場から、ソクラテスは書き言葉を「死んだ言葉」、話し言葉を「生きた言葉」と表現しました。この表現を借りれば、皆さんはこの三年間、社会全体で「死んだ言葉」が増えていく中で、これに反して、「生きた言葉」を用いる訓練をしてきたということになります。

限りなく多様化が進行していく現代の社会にあっては、今後の皆さんの職業や生活の環境も一層流動化していきます。環境が流動化すれば、そこで必要とされる資質や能力も絶えず変化します。では、自分はどうするのか。自分の手には負えないと、あきらめるのか。もちろん、そうではありません。変化を見据えた上で、それでも価値をもち続けるものについて考えるのです。変化し続ける社会にあっても価値をもち続ける資質、その一つが、「生きた言葉」を用いることなのではないでしょうか。

自分の発した言葉に責任を負うこと、これは非常に難しいことです。私自身、その責任を負いきれずに、口を閉ざすことがあることを否定はできません。高校を卒業しようとする皆さんにとっては、なお難しいことでしょう。しかし、そうであっても、皆さんが言葉に伴う責任を果たそうと努めている限り、周囲の人々は皆さんの努力に気づき、そこに新たな縁が、好ましい人間関係が生まれるはずです。いつの日か「生きた言葉」を用いる人になれるよう、その契機となった本校における感話の取り組みを、どうか記憶に留め続けてください。

結びに当たり、保護者の皆さまの本校への御支援に改めて深く感謝申し上げるとともに、卒業生の皆さんの限りない前途を祝し、皆さんが活躍し続けることを祈念して、饒の言葉といたします。

令和八年二月二十七日

東大谷高等学校長 吉永 雅也